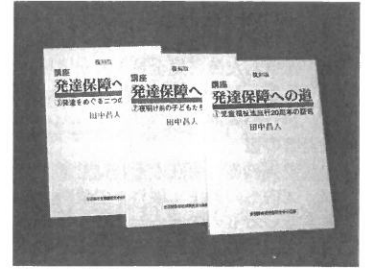


田中昌人著

## 『講座 発達保障への道』

## 発達保障論の誕生と『講座発達保障への道』

中村 隆一

全国障害者問題研究会出版部、初版1974年  
復刻版2006年

### 1. 『講座 発達保障への道』 ——連載「講座 発達保障の道を 力強くすすもう」との関係

全国障害者問題研究会（以下全障研）の『みんなのねがい』の創刊とともに、1970年2月号から1973年5月号まで19回にわたって、田中昌人が連載「講座 発達保障の道を力強くすすもう」を執筆する。その後、全障研出版部から本稿でとりあげる『講座 発達保障への道』（以下、本書）全3分冊が1974年9月に発行された。

一般には、本書は、上記の連載を単行本化したものであると思われる。確かに連載の一部が用いられてはいるが、実際にはどうだろうか。田中は、本書各分冊の「まえがき」で、『みんなのねがい』誌上に連載されたものとの対応関係を記している。それによると、確かに本書は連載をもとに単行本化したものではあるが、全19回の連載の中で約半分の8回分は単行本にするときに用いられておらず、大幅な加筆がなされている。この加筆が最も多いと考えられる第2分冊を例にとると、連載が占める割合はおおよそ1割程度に過ぎない。したがって、本書は、少なくとも1973年に完了した連載をふまえつつも、発行された1974年当時の現状や課題と田中の問題意識を軸

なかむら りゅういち  
立命館大学

にして新たに書き下ろされたものとみるのがふさわしいのだろう。おそらく、連載以降も、その発達保障論の提起や展開に当たっていくつかの整理と検討がなされたものと思われる。

### 2. 1961年の「発達保障」の提起から 「発達保障論」確立にいたる 過程における本書の位置

田中昌人による発達保障論の検討は、1960年代から1970年代にかけて始まった。

田中が、「発達保障」という表現を最初に使用したのは、近江学園年報第9号（田中、1960）においてで、その執筆は1961年1月<sup>1)</sup>である。その後、「一次元」「二次元」などの使用は1964年末、発達を記述する基本概念として「可逆操作」を用い始めたのが1965年1月頃である。この1960年代前半に田中は、個人の発達の系にかかわる基本概念の探究にまず力を注いでいた。個人の系とはいえ、人間は個人として孤立して存在しているわけではなく社会的存在であり、人間発達を論じるには、個人と社会の関係についての議論が欠かせない。この時期、田中はそれをどのように把握していたのであろうか。「発達保障」初出時点ではどうだったのだろうか。

「これまで、生活指導を考える際には、社会的生活の面からの内容要請が強かった。もちろん、その面も重視しなければならない。人間の発達は社会化の方向をもつからである。しかし、発達と